島津忠義がロシア皇帝ニコライ二世に贈った薩摩焼
―島津家と十二代沈壽官の関わりを中心に―

深港　恭子

本稿は、『国華』一五二八号第一二八編第七冊に掲載した「島津忠義が皇太子ニコライに贈った薩摩焼について ―十二代沈壽官作　錦手花卉図花瓶・錦手四君子図茶壺形蓋付壺―」に基づき、新たに分かった島津家と十二代沈壽官の関わりを加味して、改めて島津忠義とニコライ二世の交流を通してロシアへ贈られた薩摩焼について論じるものである。全体の構成は踏襲し、主に第三章「島津忠義ははぜ薩摩焼を贈ったのか」及び第四章「なぜ沈壽官窯に注文されたのか」に新たな検討を加えた。その他の章については、論旨を変えない範囲で若干の変更を加えた。図版と挿図についても論旨に合わせて見直しを行い、掲載順等を変更するなどしている。

はじめに

平成三十（二〇一八）年は明治維新から一五〇年にあたり、それを記念して鹿児島県歴史資料センター黎明館（現鹿児島県歴史・美術センター黎明館）において「華麗なる薩摩焼―万国博覧会の時代のきらめき―」展（以下、「華麗なる薩摩焼展」）が開催された。同年はロシア皇帝ニコライ二世没後一〇〇周年にもあたっており、エルミタージュ美術館が所蔵するニコライ二世（一八六八～一九一八）ゆかりの薩摩焼が初めて里帰りし、わが国で初公開された。[1]

現存しているのは、「錦手花卉図花瓶」一対（以下、花瓶）と「錦手四君子図茶壺形蓋付壺」一対（以下、蓋付壺）の二組である。いずれも旧薩摩藩主の島津忠義（一八四〇～一八九七）から献上されたもので、明治二十四（一八九一）年にロシア皇太子ニコライが来日したことをきっかけとしている。同年四月二十七日、同行していたギリシャのゲオルギオス親王（ジョージ親王）とともに長崎に上陸、明治天皇の計らいで国賓として迎えられた。[2] そして長崎に続き、鹿児島を訪問したのである。

この時の来日はロシア皇太子襲撃事件、いわゆる大津事件でよく知られている。[3] しかし、直前に訪問していた鹿児島でニコライは県民の大歓迎を受け、島津忠義と深い親交を結んだ。この二人の交流を通して、忠義からニコライに薩摩焼が三回にわたって献上された。現存する二組は革命を潜り抜けて破損し分散しつつも、エルミタージュ美術館、ペテルゴフ離宮博物館、サンクトペテルブルク国立産業芸術アカデミーの三ヶ所に現存している。

これらの製作を手掛けたのが、玉光山陶器製造場[4]（以下、沈壽官窯という。）を経営していた十二代沈壽官[5]（一八三五～一九〇六）（以下、沈壽官）である。沈壽官窯は現在まで経営が続いており、製作の経緯を物語る三枚の下絵図と数点の関連史料が伝わっている。

ニコライの来日については、大津事件をテーマとした研究は数多くあるものの、[6] 鹿児島滞在や島津忠義との交流、そしてニコライの薩摩焼に関する研究は、「華麗なる薩摩焼展」をきっかけに始まったばかりである。本稿では、薩摩焼贈呈の経緯やその製

作の状況を明らかにし、なぜ薩摩焼が献上品に選ばれたのか、そして十二代沈壽官が製作を手掛けることとなったのか、その背景について島津忠義と十二代沈壽官を軸に考察したい。

一　島津忠義が贈った薩摩焼

先述したとおり、島津忠義はニコライへ三回にわたって薩摩焼を贈った。一回目は明治二十四年にニコライ皇太子が鹿児島を訪問した際に、島津忠義から来鹿記念として贈られた。二回目はその翌年のことである。保田孝一は『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』において、「鹿児島で献上した薩摩焼の花瓶をニコライが非常に気に入ったことを知った忠義は、翌一八九二（明治二十五）年末にも東京のロシア公使を通して別の薩摩壺を献上した。」とする[7]。三回目の献上については贈答の時期を含めて後述する。

次に三カ所に分散して保管されている、現存する二組の薩摩焼についてみていこう。一組目はエルミタージュ美術館とペテルゴフ離宮博物館に別れて所蔵されている一対の花瓶である。ニコライの来鹿記念に献上されたと考えられるが、ただしニコライに贈呈したものではない。詳しくは後述するが、ニコライに同行する予定だったものの、体調を崩して直前に帰国した弟のゲオルギーに贈られたものと考えられる。

二組目は、エルミタージュ美術館とサンクトペテルブルク国立産業芸術アカデミーにそれぞれ所蔵されている一対の蓋付壺である。この蓋付壺はニコライの戴冠式に贈られたものと考えられている。

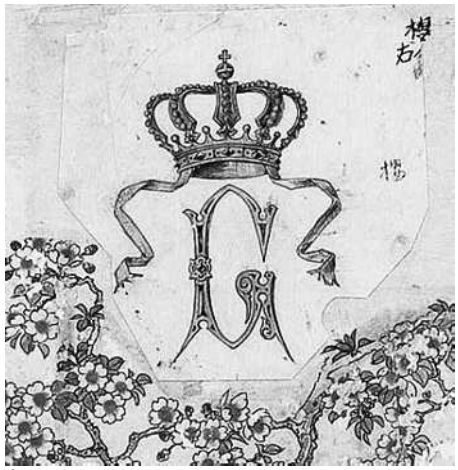
筆者は、平成二十九年に「華麗なる薩摩焼展」の事前調査として、これらの現存作品を熟覧する機会を得た。本章では現存する作品が伝来した経緯や作品の特徴を詳しく述べるとともに、そこから忠義が作品に込めた意図について考察を行いたい。加えて、二組目の蓋付壺の贈呈時期について再考する。というのも、戴冠式の折の贈答品とする根拠となっているのは、エルミタージュ美術館に残っている記録から戴冠式で贈与されたものとされていることによる一方、保田は『日記』において、「更に忠義は一八九四年末、ニコライが結婚した時、一対の薩摩壺をお祝いとして献上した」としているためである。

（一）　来鹿記念の花瓶

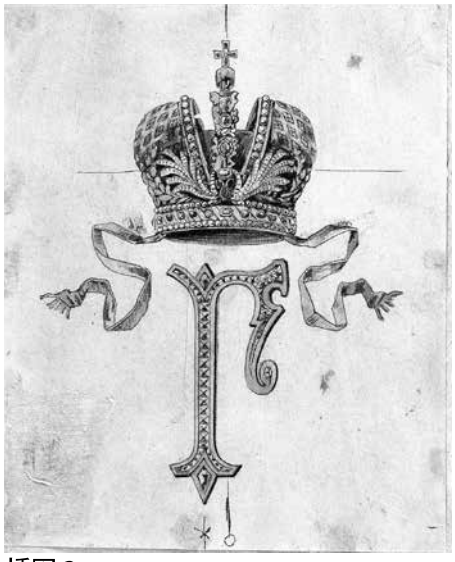
ニコライの来鹿記念に献上された一対の花瓶は、エルミタージュ美術館に右側が（図版1）、ペテルゴフ離宮博物館に左側が所蔵されている。エルミタージュ美術館は本来、冬の宮殿と呼ばれたニコライが暮らした王宮であり、ペテルゴフ離宮博物館はサンクトペテルブルクの創設者ピョートル大帝が建てた夏の宮殿であるが、左右の花瓶はいつしか離れ離れになり、それぞれが偶然にもロシア国内の市場で発見され、まったく異なる時期に両館の所蔵に帰した。どちらも一部破損し修復が施されている。高さ七一・〇×胴径四〇・〇センチメートルの細長い卵形の花瓶で、細やかな貫入で覆われた象牙色の素地に、首には花唐草文で飾った瓔珞文、腰にはラマ式蓮弁文をより華やかにした文様が施され、胴部には桜の樹木と山吹が左右対称に向かい合うような構図で描かれている。肩には、王冠の下にキリル文字の「Г」のイニシャルが描かれ、桜の幹の近くに「薩摩壽官製」の銘が金彩で描かれている。

この一対の花瓶がたどった経緯のため、当初は来歴も不明であった。両館が収集する根拠となったのは、花瓶の肩に施されたロマノフ家の王冠が描かれていたことによると考えられる。その後花瓶に施された「薩摩壽官製」の銘がきっかけとなって沈壽官窯の当主十五代沈壽官氏の知るところとなり、同家にその下絵図が伝来していたことが決め手となり、沈壽官窯で製作されたニコライ来鹿の記念品であることが明らかになった[8]。

ただし、下絵図は三枚（①～③）あり、現在はそれぞれが和額に仕立てられている。うち下絵図①（図版3）・下絵図②（図版4）はロシアに現存する来鹿記念の花



挿図１
下絵図①の王冠のイニシャルのマーク



挿図２
下絵図③の王冠とイニシャルのマーク

瓶一対と器形と文様、サイズがほぼ一致していることから、原寸大の彩色下絵図と考えられる。しかしながら、肩のマークは一致せず、デザインの異なる王冠に「G」のイニシャルがある。マークの部分は別途描かれた紙片が貼り込まれている。下絵図③（図版５）には下絵図①・②と同じ器形に菊が描かれている。右上部に「菊　右」と墨書されていることから、本図も本来一対で描かれたと推測される。首には下絵図①・②に類似する花唐草文と幾何学文様が描かれており、三枚の下絵図は同時期のものと考えられる。肩の部分はマークを入れることが想定されたと考えられる区画が確保されている。右下部にはロシアに現存する一対の花瓶と一致する王冠に「Г」のイニシャルを描いた紙片が貼り込まれている。[9] 三枚の下絵図の状況から、先に花瓶のデザインが決定され、どのマークを入れるのかが検討されたことが窺われる。

ところで、保田は『日記』において、明治二十四（一八九一）年五月六日にニコライが磯島津邸（現仙巌園）を訪れた際、「薩摩公は、私たちの姓名頭字の組み合わせ文字の入った美しい壺（二尺ばかりの薩摩焼花瓶）をゲオルギオスと私に献上してくれた」と書いていることを紹介している。[10] また『鹿児島市史』には、「島津邸ニ於テハロシア皇太子及希臘親王両殿下ニ薩摩焼花瓶ノ献上アリタリ」とある。[11] これらの記述は、ニコライとゲオルギオス親王に対してイニシャル入りの花瓶が贈られたことを物語っている。

ここで、王冠とイニシャルのマークに着目してみよう。下絵図①の王冠のデザイン（挿図１）は、ギリシャ王国において一八六二年から一九二四年まで使用された国章の王冠が想定されていると考えられる。[12] ニコライに同行したギリシャのゲオルギオス親王（ジョージ親王）は、英語圏での呼び名は「Prince George」である。宮内大臣から鹿児島県知事山内堤雲宛に届いたニコライの来鹿を知らせる通達書類にも「希臘国ジョージ親王殿下」とある。[13]

王冠の下に描かれたイニシャルの「G」は、ゲオルギオス親王の英語表記、すなわちジョージ親王の頭文字を表したものと考えられる。つまり、この花瓶はゲオルギオス親王のために準備されたものと考えられるのである。

次に下絵図③の下部に貼り込まれた王冠のデザイン（挿図２）は、ロシア帝国で一八八三年から一九一七年まで使用された国章の王冠を想定して描かれていると考えられる。実際の王冠には五千個以上の宝石がちりばめられており、中央には赤色の四〇〇カラットのレッドスピネルが配されている。[14] 下絵図に描かれた王冠の彩色は全体がピンク色がかり、ひと際大きな中央の宝石は青色で描かれている。現存する一対の花瓶も同様の彩色が施されており、形状はロマノフ家の王冠を模りつつ、色彩は独自にアレンジされている。

しかし、イニシャルの「Г」はニコライ（Николай）とは一致しない。では誰を想定したものなのであろうか。結論から言えば、ニコライの弟ゲオルギー（Георгий）の頭文字と考えられる。先に述べたとおり、ゲオルギーはニコライに同行し来日する予定であったが、明治二十三年十二月に到着したインドのボンベイ（現ムンバイ）で体調を壊し帰国したため訪日は実現しなかった。当初の鹿児島県知事宛の通達には、弟ゲオルギーを含む三名の来鹿予定とある。[15] つまり、来鹿記念の花瓶一対はニコライと同行したゲオルギオス、来日が叶わなかったゲオルギーの

三名のために準備され、実際に磯島津邸において島津忠義から贈呈されたことを物語っているのである。ちなみに、ゲオルギオスはギリシャ語では「Γεωργιος」と表記する。この場合、ゲオルギーとゲオルギオスのイニシャルが同じになるため区別した可能性もある。[16] しかし、現在確認されているのは、「Γ」のイニシャルのあるゲオルギーの花瓶のみである。

ここで、ニコライとゲオルギオスに贈られた花瓶のデザインについて、下絵図をもとに考察したい。下絵図①において、桜と山吹を描いた花瓶の絵図に貼り付けた、ゲオルギオス（ジョージ）を表す「G」マークの紙片には「桜」と墨書されており、下絵図②においては、同じ「G」マークの紙片に桜を描き足していることから、下絵図①・②にあるとおり、現存するゲオルギーに贈られた花瓶と同じ桜と山吹のデザインがゲオルギオスの花瓶にも用いられたと推定される。

ではニコライへ贈られたと考えられる花瓶はどうであろうか。ニコライの頭文字は「H」（Николай）であるため、下絵図に手がかりはない。しかし、現存するもう一組の薩摩焼、すなわちニコライの戴冠式の折に贈られたと考えられている蓋付壺（図版2）の肩に、現存するゲオルギーの花瓶と同じ王冠のデザインに「H」のイニシャルをとり合わせたマークが描かれている。[17] おそらく来鹿記念の花瓶にも、これに類似するマークが描かれていたのではなかろうか。筆者は、下絵図③にある菊を描いた花瓶が贈られた可能性が高いと考えている。わが国において、菊は皇室を象徴する文様として認知されてきた。ニコライは来日の主賓であり、将来、皇帝となる人物である。推測の域をでないものの、ニコライへ贈呈する花瓶に皇室を象徴する菊の文様を描くことで、特別の意味が込められたのではなかろうか。

このように、来鹿記念の一対の花瓶は三組が製作され、ニコライ皇太子、弟ゲオルギー親王、ギリシャのゲオルギオス親王にそれぞれ贈られたと考えられる。そして、来鹿できなかった弟ゲオルギーの花瓶一対のみが現存しているのである。

（二）戴冠式に贈られた蓋付壺

エルミタージュ美術館が所蔵するニコライ二世のコレクションに含まれる蓋付壺は、高さ八七・〇×胴径四五・〇センチメートルのひときわ色鮮やかな薩摩焼である。（図版2）

白薩摩の素地に梅、竹、蘭、菊の四君子が肩の中央に描かれた「H」のイニシャルのあるマークを中心に向き合うように描かれ、蓋上には鳳凰と藤を背景とした桐紋、瓔珞文が、首には向き合う二羽の鳳凰の中央に桐紋が描かれ、壺に布を被せて蓋をし、それを朱と金糸を織り込んだ紐で結んだデザインとなっている。二重に巻かれた紐の真ん中で蓋と身に分かれる凝った作りである。

エルミタージュ美術館では、島津忠義がニコライ二世の戴冠式に際して贈ったものと考えられている。記録によれば、一八九六年一月三日にアジア部門から冬の宮殿に移され、一九一七年にロシア革命が勃発するまでそこに置かれた後、エルミタージュ美術館に移管された。一対の壺のうち一つが、一九四八年にレニングラード高等産業芸術学校（現サンクトペテルブルク国立産業芸術アカデミー）に寄贈され、現在に至っている。[18]

この壺には作者を示す銘などは記されていないが、肩にある「H」と組み合わせた王冠のデザインが、沈壽官家に伝来する下絵図③にある「Γ」のイニシャルのある王冠の図案と一致し、かつ現存する弟ゲオルギーのための花瓶にある王冠の形

挿図３　保土田商店注文書　沈壽官家文書

状、色彩が一致することから、沈壽官窯の製作と判断して差し支えない。

ところで、沈壽官家に伝わる古文書に、蓋付壺の注文ルートの一端を示すものがある。（挿図3）明治後期、大口の取引先であった横浜の保土田商店[19]から沈壽官窯への注文書に「又袋形　但シ、先年沈壽誠氏ヨリ島津家江納メ、仝家ヨリロ国皇太子江献上ノ品ノ形ノ通リ品ヲ」とある。略画ではあるが蓋付壺の形がスケッチされており、ニコライへ献上した袋形（蓋付壺）と同じ形のものを求めたものである。文意から、ニコライへ贈られた蓋付壺は、沈壽誠から島津家（袖ヶ崎邸）へ納められたことがわかる。沈壽誠は沈壽官の弟で、東京芝区田町にあった沈壽官窯東京支店を任されていた。つまり、沈壽官窯で製造された蓋付壺は、東京支店を通して島津家へ納品され、島津家からニコライへと贈られたのである。

（三）蓋付壺の贈呈時期

蓋付壺は戴冠式の記念に献上されたと考えられており、現在では広く認知されている。エルミタージュ美術館に残る記録がその根拠となっており、筆者が企画した「華麗なる薩摩焼展」においてもそれを踏襲した。ただし、この贈呈時期については疑問もある。

ニコライの戴冠式は明治二十九（一八九六）年五月二十六日に挙行された。しかしエルミタージュ美術館の記録では、戴冠式の記念に贈呈されたとしながらも、同年一月三日にアジア部門から冬の宮殿に移されたとしており、五か月も前の段階ですでに贈呈されていたこととなる。

戴冠式の折の島津忠義の献上品は、明治天皇の贈呈品と同様、式に列席した伏見宮貞愛親王に託して贈呈された。『貞愛親王事蹟』には、六月五日午後に「クレムリ宮に御参内、宝物陳列館に於て皇帝、皇后に御謁見、聖上より皇帝へ御贈進の象牙細工白大甍置物及び皇后宮より皇后へ御贈進の波模様縫取六枚折屏風一隻を捧呈し給へり。次で万里小路式部官は島津侯爵献上の太刀一振、北賀市太郎（大津遭難当時の車夫）献上の銅製香炉一個を皇帝に伝献したり。」とある。[20] つまり六月五日に、戴冠式が行われたクレムリン宮の宝物陳列館において、伏見宮貞愛親王に随行していた万里小路式武官により島津忠義献上の太刀一振りが皇帝ニコライ二世に献上されたのである。

『日記』によれば、ニコライはこの日のことを「午後二時半にローマ教皇の外交代表アリアルディに別れを告げた。武器庫を急いで視察。そこのかつての広間で日本のプリンス伏見宮が、天皇とわが友薩摩（島津忠義）公からのとても美しい贈り物を持ってきてくれた」と記している。[21] これらの記録による限り、忠義は戴冠式に太刀を贈ったのであり、贈呈された日は六月五日であったと考えるのが妥当であろう。

では、蓋付壺はいつ贈呈されたのであろうか。『日記』にはニコライの日記すべてが掲載されているわけではないが、保田の論述は日記を元に述べられている。その中で保田は「鹿児島で献上した薩摩焼の花瓶をニコライが非常に気に入ったことを知った忠義は、翌一八九二年（明治二十五）末にも東京のロシア公使を通して別の薩摩壺を献上した。（中略）更に忠義は、一八九四年末、ニコライが結婚した時、一対の薩摩壺をお祝いとして献上した。皇帝ニコライの戴冠式の引き出物として太刀を献上したことは後で問題にする」と記しており、薩摩焼が一八九四年のニコライの結婚祝いに贈られたとしている。[22] 蓋付壺が一八九四年に贈呈されていたとすれば、エルミタージュ美術館の記録にある、一八九六年一月三日にアジア部門から冬の宮殿に移されたという来歴との齟齬はない。

蓋付壺一対の贈呈が一八九四年の結婚祝いの折であったのかを明らかにするには、ニコライの日記を改めて確認する必要があろう。筆者は未見であるため、ここでの断定は差し控えるが、戴冠式での贈呈品が太刀であったことが明確であることから、エルミタージュ美術館の記録とも矛盾のない、結婚式の折に贈呈されたと考えるのが最も妥当性が高いと言えよう。

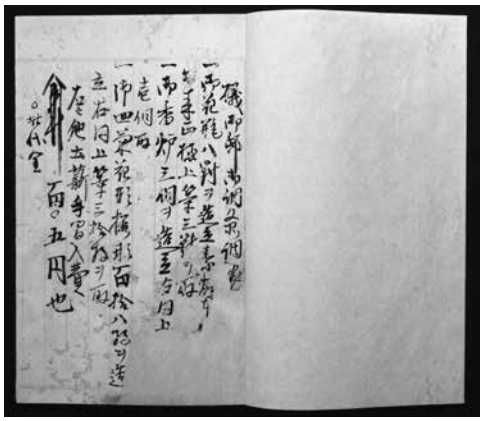
二　沈壽官窯における花瓶製作

島津忠義がニコライに薩摩焼を贈呈したのは、明治二十四（一八九一）年から同二

十九年までの間である。ここでは同時期の沈壽官窯の経営状況を分析することによって、献上された薩摩焼を製作の面から明らかにしたい。特に沈壽官窯に関連する史料が残っている来鹿記念の花瓶を中心に検討を進める。

（一）「磯御邸御調文品調帳」にみる島津家の注文

沈壽官家文書[23]に「磯御邸御調文品調帳」（以下、「調帳」）と題された罫線紙三丁からなる和綴じの記録がある（挿図4）。ニコライの訪問からわずか二日後の五月八日付で、沈壽官窯の画工森山周運と林春達が十二代沈壽官に対して磯島津邸からの注文品の製作にかかった経費を報告したもので、内容からニコライの来鹿の記念品に関連するものとみられる。「調帳」によれば、一対の花瓶三組に加え、香炉一個、菊花形と桜形の皿三十枚の注文を受けている。花瓶三組の注文は、ニコライ、ゲオルギオス、ゲオルギーの三名に対し花瓶が製作されたことを示唆するものである。また、皿の形が菊と桜になっていることは、先に述べた、沈壽官窯に残る花瓶の下絵図①・②・③ともモチーフが共通しており、筆者が先に指摘したニコライに贈られた花瓶のモチーフが下絵図③にある菊であった可能性を支持するものといえよう。



挿図４　磯御邸調文品調帳　沈壽官家文書

ところで来鹿の一行は、ニコライ、ゲオルギオスに加え、随員八人、水帥提督一人、艦長及び仕官六人、公使及び館員三人、領事一人の合計二十一人で構成され、これに接伴委員長の有栖川威仁親王を始めとした五人が同行しており、島津忠義は磯島津邸に総勢二十六人を迎えている[24]。推測の域を出ないが、「調帳」にある香炉一個は有栖川親王へ、皿三十枚は来邸した人々全員への記念品だったのではなかろうか。一部の文献で、花瓶に加え一尺ほどの皿も献上されたとあることにも通じる[25]。

製作にあたっては、三組の花瓶を仕上げるために八組の素地が本焼きされ、同様に香炉一個に三個が、皿三十枚に一〇八枚が準備され、極上等に仕上がった素地のみを選りすぐって上絵付けが施された。いずれも注文数の約三倍に近い数が焼成されており、沈壽官窯にとっても、高い品質を求められる注文であったことが窺える。

製作に要した経費も記されており、素地（白薩摩）製作費一〇五円、上絵付けから完成品の納品までの経費二五円、金粉購入費一八五円七〇銭、画工費一九三円四四銭、総計五〇九円一四銭が報告されている。

一般に細工費に比べて画工費のほうが高額であるとされる。「調帳」では明確に区別することはできないが、素地製作費一〇五円に対して、画工の経費だけでも一九三円を超えており、上絵付け以降の工程に圧倒的に経費が費やされている。とりわけ金彩の原料である金粉代だけで一八五円七〇銭に上っており、全体経費の約三十六パーセントを占めていることは注目されよう。金粉は大阪から極々上等品が仕入れられている。国賓への献上品に用いられるものであるから当然とはいえ、現存する花瓶を見る限り、決して金彩で器面を埋めている訳ではない。むしろ白薩摩の素地に価値を置きつつ、素地と上絵付けの調和が目指されており、金彩は色絵の具と協調しつつ、上質の金の発色がこの花瓶に品格をもたらしている。ここに、薩摩焼に対する沈壽官の価値観が現われているといえよう。

（二）製作期間

ニコライ一行の来鹿を具体的に伝えた最も早い時期の記録は、管見では明治二十四（一八九一）年三月九日付で、五月五・六日頃の来鹿予定を伝え、不都合なく取り計らうよう要請した宮内大臣土方久元から県知事山内堤雲に宛てられた宮内省外事課の報である[26]。とはいえ、ここに至る迄に受入の可否などについて調整が行われたであろうことから、もっと早い段階で情報は入っていただろう。

ちなみに来日が正式に決定したのは明治二十三年十月二日のことであるが[27]、それよ

り先、同年八月十五日付の官報に倫敦発の電報を情報源として、来日の予定が報じられている。[28] また、島津忠義の磯島津邸での接待に協力した式部官長崎省吾は、ロシア公使シューヴィチから鹿児島訪問の提案があったため、在京の忠義を訪ねニコライを国賓として迎える明治天皇の意思を伝え、忠義がこれを受けたと回想している。[29] 来鹿の報は正式決定から程なく伝えられたものと思われる。

島津家から沈壽官窯に対して注文がなされた時期は不明であるが、薩摩焼では大型品にあたる高さ七〇センチほどの花瓶一対を三組、それに加え香炉や皿が準備されたことを勘案すると、構想段階も含め製作にはかなりの時間を要したことが予想される。

製作期間を考えるうえでは、「調帳」において、上画工経費が延べ三四〇人となっていることが参考になろう。一つの製品の絵付けを複数人で行うことは量産品でない限りまずない。とりわけ、献上品である三組の花瓶の絵付けには、一組に一人の上画工が携わったと推測される。そう仮定すると、一組の絵付けにかかった期間は約四ヶ月弱ということになる。また、薩摩焼においては、金彩は絵付けの最初の段階で施されるため、明治二十四年に入って相当量の金粉を購入していることを考慮すると、三組すべての注文品が絵付けの段階に入ったのは同年に入ってからであったと推測される。とはいえ、絵付けに至るまでに、原料の精製、成形、素焼、本焼を経ているため、島津家からの注文が明治二十三年のうちになされたことは間違いなかろう。

（三）花瓶の製作者

島津家から注文を受けた十二代沈壽官は自身も薩摩焼の技術者であり、苗代川陶器会社では工長を務め職工らを率いていたが、明治八（一八七五）年に沈壽官窯を創業して以降は経営に徹したようである。明治二十三年には内国勧業博覧会に出品していたこともあり、わかっているだけでも夏から秋にかけては東京に滞在しており、苗代川の窯場に対して製品の注文や製作現場への指示等を幾度も手紙で伝えている。

沈壽官家文書には「星帳」、いわゆる出勤表も含まれている。職工は大きく細工方と画工方に分かれており、明治二十三年を例にとると、細工方に三十人、画工方に二十三人の名がみえる。[30] 細工方の筆頭には金泰京、続いて朴龍易、何正悦らが名を連ねている。しかし、細工方は大細工、小細工、彫刻などに細分化されていたとみられ、誰が献上品の花瓶を手掛けたのか特定は難しい。来鹿記念の花瓶は成形法を見る限り、水引きロクロではなく、大型品に用いられるタタキ技法で成形されている。筆頭の金泰京は彫刻技術に秀で、鋳込み成形によるフィギュアに優品を残しているため該当しない可能性が高い。

一方、画工方には二十三人の名が見え、森山周運（何周運）を筆頭に鄭玄篤、林春達、卜正角らが名を連ねている。「調帳」の報告者である森山周運と林春達はともに画工であり、周運は高さ一〇〇・〇センチメートルを超える大作に銘のある作例があることから、この両名が中心となって絵付けを担当したとみてよいだろう。

（四）素地の製作

沈壽官家文書には、原料の購入に関わる記録が二十点ほど含まれている。このうち、「白土買入帳」（明治二十一年一月～二十二年一月）と「加世田砂・揖宿白土・霧島白土買入簿」（明治三十六年一月～三十七年八月）から、素地原料の購入量をまとめたのが「白土購入量比較表」（表1）である。欠損が多いためおおよその数値であるが、明治二十一年から同三十七年まで同じ原料が使用されていたことが窺えるため、ニコライへ贈呈された薩摩焼にもこれらの原料が用いられたと考えられる。

指宿は白薩摩原料の主産地で、指宿松久保土と山川鰻土も同地域に属し、大きくは指宿土（指宿白土）に区分される。指宿土には可塑性に優れたネバ土と保形性に優れたバラ土があり、両者

M21.1～22.1

産地	俵
加世田白砂	約639
霧島白土	約354
指宿松久保土	約219
山川鰻土	約160
合計	約1372

M36.1～37.8

産地	俵
加世田白砂	175
霧島白土	72
指宿松久保土	120
山川鰻土	30
合計	397

表１　白土購入量比較表

白薩摩

原料	升	調合割合
加世田白砂	1	50.0%
指宿土	1	50.0%

白薩摩大型品

原料	升	調合割合
加世田白砂	5	26.3%
指宿松久保(バラ)土	8	42.1%
指宿ネバ土	6	31.6%

表２　白薩摩調合比較表

とも耐火性に富む。霧島土（霧島白土）も耐火性に富むが、特に素地の色合いを白くし、貫入を微細にする目的で用いられ、加世田白砂は素地の可塑性を幾分低減し、焼き締まりを良くする原料である。製作物に合わせてこれらの調合を調整し素地が製造された[31]。

薩摩焼は陶器のため磁器に比べて胎土が脆弱であることから、水挽きロクロで大型品を成形するのは難しい。そのため、大型品ではタタキ技法によって成形される。ニコライへの献上品もこの成形法によっている。タタキ技法で成形される大型品の調合は、ロクロ成形が主の一般的な白薩摩の調合とは異なっている。「白薩摩調合比較表」[32]（表2）は、明治前期の一般的な白薩摩と大型品の調合を比較したものであるが、大型品では保形性に優れたバラ土の含有量を多くしていることがわかる。

タタキは、ロクロの場合より水分量の少ない粘土を太い紐状にして積み上げ、外側と内側から専用の道具を使って叩き締めていくことにより成形する技法である。輸出向けの錦手製品を数多く製造していた沈壽官窯には、現在でも高さが一メートルを超える大型品の素地が相当数伝来している。それらを観察すると、タタキ成形による素地では、太い紐状の粘度を捻りこむように積み上げていった痕跡が側壁の表面にリズミカルに残っている。（挿図5）同様の痕跡は、ニコライに贈呈された蓋付壺にも顕著に現れている。また、内壁にはタタキ痕を撫で消したときの櫛目が残る。一見すると水挽きのロクロ目のように見えるが、水分が少ないため櫛目が立っており、水挽きのような滑らかさはない。また、へたりを抑えるために素地は厚くなっている。

挿図５《白薩摩龍耳花瓶》
沈家伝世品収蔵庫

（五）上絵付け

先に述べたとおり、薩摩焼の上絵付けの手順は金彩の扱い方に他の産地とは違いがある。例えば京都ではまず色絵の具で文様を描き、一度錦窯で焼き付けた後、色絵の具の上に金彩を施し、より低い温度で再度焼き付けるが、薩摩では金彩は輪郭線に用いられることが多く、先に金彩を描き、その中を埋めるように色絵の具を置いていく。この場合、錦窯での焼き付けが一度ですむという合理性はあるものの、金彩と色絵の具が重なると干渉しあい失敗につながるため、重ねずかつ隙間ができないように描く高度な技術と丹念さが求められる。沈壽官窯もこの彩色法によっており、ニコライへ贈呈された薩摩焼もこの手順で上絵付けが施されている。

また、金彩に厚みを加える場合も、金を何層にも重ねる金高盛の技法が用いられている。ニコライに贈呈された薩摩焼のうち、蓋付壺では特に金彩で描かれた桐紋や連続文様の輪郭線などに盛り上がりが認められるが、その部分に金高盛が施されている。

ところで沈壽官窯には、明治時代から使用されていたと考えられる錦窯が一基残されている。錦窯としては比較的大型のものであるが大型品には対応しておらず、ニコライへの贈呈品を含めて、大型品の上絵付けがどのように焼き付けられていたのかについては不明な点が多い。しかしながら、「沈壽官事蹟」に、「絵具の配合・火度の加減に注意し、遂に火度強盛なる本焼窯を以て極めて密画と雖能く之を焼付くるを得るに至り」とあって、本焼窯で上絵付けの焼き付けを行っていたことが記されている[33]。当時

挿図６　沈壽官窯の登り窯　筆者撮影

の沈壽官窯には十一室からなる本焼窯（連房式登り窯）があり、改築により小型化されたものの現在も使用されている。（挿図6）この登り窯で上絵付けの焼き付けが行われていた可能性があるが、現在の沈壽官窯には、焼成法などは伝えられていない。

三　島津忠義はなぜ薩摩焼を贈ったのか

島津忠義はなぜ献上品として薩摩焼を選んだのだろうか。そのためにまず、来鹿したニコライ一行の訪問先とそこで受けた饗応の内容をまとめ、その分析から考察を進めたい。

（一）磯島津邸での饗応と大津事件の対応

ニコライ一行の鹿児島滞在は五月六日のわずか一日であった。午前九時二十五分に上陸し、県庁で小休した後、授産場を見学し、名山小学校での知事主催の昼食と有志者による歓迎の催しに参加、田之浦陶器製造所を経由して磯島津邸を訪問した。そこで島津忠義の饗応を受けた後、午後六時四十分に帰艦している。

来鹿中の日程は鹿児島県と市で綿密な計画が組まれ、その内容が記録として残っているものの、[34] 磯島津邸での饗応の内容についてはほとんど記載がない。島津忠義に一任されていたようであるが、海外経験豊かな元外交官で当時宮内大臣秘書官兼式部官として勤務していた長崎省吾が派遣され、忠義と長崎を中心に奉迎の内容が練られた。[35]

当日は前半部を県庁が、後半部を島津家が担当した形であるが、前半部がおよそ三時間であったのに対し、後半部の磯島津邸での滞在時間は五時間が組まれており、鹿児島での主たる奉迎の場が磯島津邸であったことが窺える。

ここで、磯島津邸での日程を詳しくみてみよう。

・甲冑姿の薩摩武士二百余名が控える中、島津忠義・長崎省吾等が出迎え
・弓術師範役東郷重持による古式の腰矢・数矢披露
・忠義の息秀丸（六歳）に率いられた甲冑武者二百名による武士踊り
・華倉馬場での犬追物の張行。忠義や東郷重持らが射手を務める
・邸内で種々の陳列品を台覧（鎧鎗刀、蒔絵類の器物、古薩摩焼など）
・饗宴（薩摩琵琶と琴の弾奏、島津家から薩摩焼の献上、日本料理の饗宴）

このように、島津邸ではまず庭園で甲冑姿の武士踊と弓術、犬追物という武家文化が実演された。ニコライから武士踊りの起源や演者の身分について質問があり、掛員が武士の職務及び百二外城の配置法などを説明している。特に武士は平素農耕の業に従い、有事の際には武器をとって戦うという体制がロシアのコサック兵の制度に似ていることに強い興味を示したといい、武家制度に対するニコライの関心が窺える。[36]

その後、邸内において島津家伝来の武具類や漆器、陶磁器を台覧した後、薩摩ゆかりの絵師の掛け幅などが飾られた部屋で薩摩琵琶と琴の弾奏が行われ、藩政時代の膳部による日本料理がふるまわれた。配膳係の女性は旧藩士の身内の娘で、藩政時代の御殿での髪型に結い、振袖姿という徹底したものであった。ニコライは日記に「ロシアでも、いつでもこういう夕食をとりたいものだ」と記しており、島津家の饗応がたいへん気に入ったことは間違いない。[37]

こうして友好のうちに終了した鹿児島訪問を離れニコライは京都へ移動するが、そこで一歩間違えば「国難」へと発展しかねない事件が発生する。大津事件である。国賓が、あろうことか警護の巡査から斬り付けられるという事態に対し、その日のうちに明治天皇の行幸が決定、五月十二日夜に京都に到着、翌十三日午前、京都常磐ホテルに滞在中のニコライを見舞った。[38]

一方、ニコライ負傷の報を聞いた島津忠義も即座に動いた。この時の動向が「日高宗高手記」に詳しく記されている。[39] それによれば、五月十二日夜に安倍川丸に乗船して上京、十四日夜に神戸港に着船した。翌十五日、天皇同道のもと十三日のうちに神戸に至り、アゾフ号に移っていたニコライを見舞っている。午後三時、忠義はニコライから出された御迎船でアゾフ号に乗船、ニコライの出迎えを受け、部屋に招き入れられ歓談ののち三時過ぎには退いた。この時ニコライは次のように挨拶したという。

○皇太子の挨拶

一二昼夜ヲ費ヤス程ノ遠方態々訪問ヲ蒙ルコト感謝ニ絶ヘズ
一遭難ノ有様ヲ想ニ語ラレタリ
一鹿児島ニ於テ鄭重ナル歓待今ニ忘レズ今後モ〇〇ニ銘ストノ謝詞

続いて犬追物を見たときに弓術を能くした人物はここに来ているかと問い、その人東郷重持を見て大いにその業を賞美したという。

忠義はその後汽車で京都に移動、天皇のご様子伺いとして御用邸を訪ね宮内省に出頭したのち中村楼に宿泊、翌十六日午前九時、天皇に面会した。

十九日には、ニコライからの招きでアゾフ号を訪れ、丁寧で愛情のこもった言葉を伝えられ、金杯のコップ一個を贈られた。このとき、ニコライは自ら卓上の天鵞絨張の箱を開け、これは我が国の旧都モスクワの宮殿にある古い形を模したもので、今回の記念に進呈すると伝えたという。忠義はこれを受け取り、永く殿下の記念として我が家に保存するのはもちろん、一家の歴史に伝え子孫に遺すと答えたという。

（二）島津忠義の意図

そもそもニコライの来日はウラジオストクで行われたウスリー鉄道の起工式に出席するために日本に立ち寄るという観光の意図の強いものであった。[40] この訪日において鹿児島訪問に至った経緯について、『日記』には、日本側からの提案によるものと、ロシア側からの要請によるものという相対する説が示されている。後者は島津忠義を助けて接待掛を務めた長崎省吾の回想から、長崎が在京の忠義を訪ね、国賓として遇する明治天皇の御意思を伝えたところ、忠義が引き受けることを決意し、この時長崎が接待掛を務めることが決まったとしている。尾竹猛の『大津事件』に見る限り、国賓として迎えることが決まった当初鹿児島が訪問先として入っている気配はない。国内寄港地としても長崎・神戸・横浜・青森が挙げられている。鹿児島訪問は当初の計画にはなく、忠義はロシア側の要請を受け入れたのではなかろうか。

忠義に別れを告げる際、ニコライは「日本第一流ノ貴族、第一流ノ勤王家、第一ノ旧家タル島津家ヨリ此ノ如ク優渥懇篤ナル待遇ヲ受ケタルハ獨リ余ノミナラス日本皇帝陛下ニ此旨言上ニ及ハバ　陛下ニモ亦定メテ御満足ナラン」と述べたという。[41] ここにニコライの理解が集約されているといえよう。その関心は島津家の歴史と格式、そして新しい国家体制の構築に中心的な役割を担ったことに向けられている。このことが鹿児島訪問の根拠であったのではあるまいか。

ところで、ニコライは先に訪問した長崎でも有田焼陶磁器や蜜柑、紙鳶などの地元の特産品を台覧し、日本料理の饗応を受けている。一見すると、鹿児島での行程とさほど変わらないようにみえるが、磯島津邸での饗応は全く異なるものであった。なかでも犬追物は鎌倉時代に遡る歴史をもつ島津家の御家芸ともいうべき武芸であり、明治十二（一八七九）年と同十四年には、吹上禁苑において明治天皇の御前で張行されている。[42] また、甲冑武者の武士踊りや弓術の披露、琴の弾奏はもちろん、日本料理の饗応は武家文化に則った古式でふるまわれており、給仕係の着物や髪型に至る迄徹底されていた。

ニコライに同席し琴の弾奏を聴いた日本在住のロシア公使シューヴィチが、「東京鹿鳴館ニ於テ日本ノ諸遊戯ヲ見タリ。然レトモ斯ル微妙閑雅ナル曲ヲ聞クハ実ニ今回ヲ以テ嚆矢トス」と述べていることからも窺えるように、[43] 忠義のこだわりは西欧に感化されていない純然たる武家文化の披露にあったと考えられる。

この古色蒼然とした異文化体験は、ニコライに鮮烈な印象をもたらすとともに、歓迎に心を尽くした忠義に対する好感を育んだと思われる。こうして結ばれた友好関係と忠義が贈った薩摩焼の花瓶をニコライが気に入ったという事実が、その後の二度にわたる薩摩焼の贈呈へと結びついたと考えられる。

犬追物や弓術は、明治五（一八七二）年に明治天皇が鹿児島を行幸した際や同十四年の島津家袖ヶ崎邸の行幸の折にも披露された、賓客を迎える際の慣習に基づいたものであり、その目的はとりもなおさず、島津家の伝統と格式を伝えるものであったと判断できよう。

では、薩摩焼が贈答品として選ばれたのはなぜだったのだろうか。

一つ目は、薩摩焼が参勤交代の国元土産や大名間の贈答品として用いられてきたと